



大阪のど真ん中で育ったここの関西人が、北の大地・東川の臨時職員として新たな人生の第一歩を踏み出しました。高校生のころ、写真の聖地として憧れの地だった「写真甲子園のまち」はこの春、選択の地として人生の大きなメモリアルポイントになりました。今まで写真表現を追い続けてきた感性は、この地でどんな人生のドラマを演出するでしょうか。



「人を撮るのが好きなんだけれど、あまり人が大勢いると怖くて撮れない。周りの風景と人との空気が好き。ここはそういう意味でも、大阪とはまったく違うので新鮮」。

昨年4月から5月にかけて、撮影制作のためにこのまちに長期滞在していました。テーマは「帰りたい場所」。

「大阪だけが帰りたい場所じゃないよなあ……って。その時『この町が好きだなあ』という自分に気がついたんです」。

朝露にきらめく稲穂が撮りたくて農家に寄った時、『朝ごはん食べて行きな』ってご馳走になって、ご飯が『こんなにおいしいの!』って感動してしまった。今まで朝はそんなに食べるほうではなかったのに。トマトも『食べな』ってボンと渡されて『おいしいなあ、これっ!』って初めて気がついて、そのときから食べるようになった。

「憧れってというか：景色がきれい、空気がきれい、というのもあるけれど、人が優しい。大阪って人情の町って言われていて、そんなところで

育ったから、おおらかで包み込んでくれる感じがするのがいい。大阪人って周りの人に関心が強いんだけど、それを受け入れてくれる気がする」。

写真甲子園に出場後、ボランティアスタッフとして毎年のように来町しているうち「裏方ってどういうことをするんだろう?」と興味が募り、大学卒業後、仕事として決めてしまいました。「外から来た人じゃなくて、中から関わってみたいかった」。

町内に居を構えてまだ3カ月あまり。「今まで外から来た人という感覚だったけれど、これからは住んでいる人の立場で、写真(表現の可能性)を広げたい。景色や風景も撮ってみたい。『きれい』と思える景色がたくさんあるので、素直に写真に表現できないかな、と思っっています」。

「後輩たち、今年もたぶん(決戦大会に)来ると思うけれど、がんばってほしいなあ」。今年スタッフの一人として心からエールを送るつもりです。

大阪市立工芸高校写真部の撮影合宿と一緒に同行 (香川県勢島、2008年8月)



大阪市内の先輩のギャラリーで写真講習会(工芸高校写真部OBの集まり)昨年5月



子供たちと遊びながら、よく写真を撮りました (大阪の下町で、2007年12月)



大学のゼミで水牛に乗って (石垣島、2008年8月)

よしごと ひろこ 吉里 演子さん/町写真の町課臨時職員/東町/☎82-4700(文化ギャラリー) 大阪市出身。大阪芸術大学写真学科卒。学芸員。国際写真フェスティバルに際する各種事業の指導、運営、インターネット発信情報の入力・更新、町文化ギャラリー収蔵作品の整理・データベース化、展示など、年々業務量が増大している文化ギャラリー全般の業務を担当します。大阪市立工芸高校3年生在学時に第12回写真甲子園(2005年)本戦大会に出場、優秀賞受賞。北海道写真月間(昨年8月、東川)のストリートギャラリー展でグランプリ受賞。高校卒業後、大阪工芸高校映像デザイン科50周年記念展「すっPん!!」、同科OB生の作品展「すっPん!!2007」、同科47期生有志のグループ展「1DK」に参加。作品作りの撮影活動を続けています。